**「梅」の発音を考える（その１）**

HP：「日本語の起源」

<http://ichhan.sakura.ne.jp>/

今回の更新：～/japanese/japanese5hp.docx

メール：ichhanh@ichhan.sakura.ne.jp

2024.10.17

**目次**

1. はじめに p3
2. 上古侵（談）と蒸中東（陽）の押韻を考える p3
3. 朝鮮漢字音の唇音韻尾について考える p7
4. 「梅」の発音を考える p13
5. おわりに p17

【注】　　　　　　　　　　　　　　　　 p17

【引用書】 　　 p27

1.はじめに

前回は日本寄語の「天　天帝」の「天」を太陽とみて、「天　天帶（＝お」と解読しました。そしてこの「天道」を首里方言の「ティダ」（太陽）に結びつける・亀井氏の天道説（「ティダ（太陽）は天道にさかのぼる」）には問題があることを述べておきました。

また前回のHP（～japanese/japanese4hp.docx：2023.9.22）では本土方言の「お」（「」）と琉球方言の「ティダ」（語音翻訳では텬ten＋다taX：前回のHPの注63）がtentaXから分かれたと考え、そのtaX（接尾語）をオーストロネシア語族の接頭辞＊taNと関係づけるアイディア注1を述べておきました。そしてその注72に「詩経の「〈3〉侵（談）：蒸中東（陽）の通韻」（藤堂　昭和62：26）がこの問題を解くヒントとなるでしょう。」と書いておきました。

そこで詩経にみえる「〈3〉侵（談）：蒸中東（陽）の通韻」の問題は日本語の「梅」の発音の変化と深くかかわっているので、今回「「梅」の発音を考える」という題で考察することにしました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024.10.17

ichhan

1. 上古侵（談）と蒸中東（陽）の押韻を考える

今回は「梅」の発音を考えていくのですが、まずそのために中国語上古音の唇音韻尾mと喉音韻尾ŋの問題を考えることにします。

詩経にみえる押韻については、「（上略）段氏はかくて古韻部注2の枠を超えて押韻するのを，例外的な寛い押韻法，即ち「古合韻」と名づけた。」（藤堂　昭和62：23）そうです。しかし「然るに侵əm：蒸əŋ，中oŋ，東uŋの押韻（詩経中12例）や，眞en：耕eŋ（詩経中23例）の押韻に至っては，簡単に合韻とはいい切れない」（同書：25）」注3のですが、それらの韻尾の枠をこえて押韻するものに対しては「例えば「難」：「阿」「何」（湿桑）はan：ar（元歌の対転）,「敦」：「遺」「摧」（邶，北門）はən：ər（文微《筆者注：上古文部ənと微部ər》）の合韻で一応説明される（略）」（同書：26）ようになりました。

このように「「-r：-n：-t」のように，同じ調音部位の韻尾が通転することを考えた」（同書：26）対転説注4が生まれたのですが、その対転説をもってしても説明できない押韻が詩経にみられます。

そこで藤堂氏は詩経にみえるこれらの不思議な押韻を次のように3分類し、方言説として次のように説明されました（同書：26）。

「以上の如く，方言説で説明するのが適当である押韻法は，凡そ三類ある。〈1〉眞耕通韻，〈2〉歌元，微文，脂眞その外-n型韻と-ɡ韻の通転，〈3〉侵（談）：蒸中東（陽）の通韻注5がそれである。」

　ここからは〈1〉〈2〉の問題は今回とりあげず、〈3〉の上古侵（談）部と蒸中東（陽）部の通韻の問題を考えることにします。

　藤堂氏は侵（談）と蒸中東（陽）の通韻に対して、次のような考えをだされています（同書：27）。

「これに対して〈3〉の現象は，蒸中東が-ŋ型でなくして-m型であったため，侵部と押韻したのであり、それは江永の論じたとおり周畿以西秦蜀にかけて現れる。楚方言は〈2〉〈3〉の特色を共有したようである。」

ところで鼻音の一般的な変化はm→n→ŋ注6であり、中国語北方（官話系）方言においてmの消滅注7（m→nの変化）が起きたのは明代（1368-1644年）中ごろ以降とみられています。そこでm→nの変化が明代中ごろ以降起きたのであるなら、m（上古）→n→ŋのような変化が上古に起きていたとはとても考えることはできないでしょう。そこで藤堂氏は蒸中東陽部ŋがもとmであったとみて、「この-m型が何らかの理由で，ŋ化し，『切韻』に収録されたのである。」（同書：30）と考えられました。しかし問題になることがあります。なぜなら一般向けの音声学の教科書にはm→n→ŋの鼻音の変化は必ず取り上げられていますが、m→ŋの変化を説くものはみることができません。そこで音声学的にはm→ŋのような直接的な変化は起きないと考えられることから、上古の蒸中東陽部のŋがもと侵談部のmであったという藤堂説は成り立ちがたいと考えられるでしょう。

そこでこの蒸中東陽部がm→ŋの変化を起こしたとみれば、侵（談）と蒸中東（陽）の通韻が説明できるのに、m→ŋの変化は音声学的には起きないという矛盾を解くために、上古における去声字と入声字との通押を考えることにします。

サンスクリット（梵語）のsudarśanaは次のように漢訳されています（水谷　昭和42：100）。

「Skt. *su**darśana*，　Pali *sudassana*　（人名・山名等の個有名詞）

　須帯天　後漢・支婁迦讖訳「道行般若経」（179訳）」

上の漢訳から、「帯」（中古蟹摂去声泰韻tai）は「むしろ上古音《筆者注：「（筆者補：祭月部）陰類ad（改行）1　帯tad→tai（泰）」（藤堂　昭和42：84）》において考えるような舌音系統の韻尾（筆者注：d）を推定するのをより妥当としよう」（水谷　昭和42：100）という考えがでてくるでしょう。このことは日本漢字音で「出シュツ（入）―出スイ（去）」注8（藤堂　昭和42：41）のように一字が去声と入声に読まれたり、「夬クヮイ（去）－決ケツ（入）」（同書：41）のように同じ諧声系列にある字が去声と入声に読まれたりすることを考えると、上古に去声字と入声字が通押していたと考えることができるでしょう。

そこで胡適氏は「上古の「歌」部・「脂」部以外はすべて古代に何らか入声に似た韻尾を有する韻，すなわち〈古入声〉であったと推定した。」（藤堂　1980：297）のです。これによって、「《切韻》に「泰・夬・祭・廢」のような去声だけの韻が存在する理由も説明できる。つまりこれらは〈古入声〉のうち、最ものちまで韻尾を保存した部類なのである。」（同書：297）と考えることができるでしょう。。

その後、一般の入声（筆者注：中古にあったとされる入声p/t/k）との違いを説明するために、「古入声の韻尾が，/d//g/などの‘有声の内破音’であったろうという仮説が登場し」（同書：297）ました。

藤堂氏はこの仮説注9を次のように説明されています注10（同書：298）。

「「來」＊[ləg]：「塞」＊[sak]や，「垢」＊[kug]：「穀」＊[kuk]が《詩經》で押韻したのも，当然のことだと言える。しかも/-g//-d/は有声音で，その音調が一般に低めであろうから，それが消失した後にも，尻下がりの語調が残って去声になるのだと説明しうる。」

このように上古の陰類韻尾にはg（牙音）/d（舌音）が再構され、上古音は陽類（m/n/ŋ）、入類（p/t/k）、陰類（-/d・r/g）と体系化がなされたのですが、なぜか陰類のb（唇音）の再構はなされませんでした。そこで唇音の陽類（侵əm談am）と入類（緝əp葉ap）が再構されたのに、陰類のəb/abが再構されなかったのはなぜかという疑問がでてくるでしょう。

この疑問にたいして「内」（中古去声隊韻nuəi）の諧声系列字に「納」（入声合韻nəp）や「訥」（入声没韻nuət）がみられることから、藤堂氏は次のように考えられました（同書：302）。

「内」は太古には/nwəb/であったが，《詩經》時代に/nwəd/になり, 「隊術」部に含まれる。それがさらに/nuəj/になって《切韻》に収録された。同様に，「蓋」は/kab/（太古）→/kad/（詩經時代）→/kaj/（切韻）のように変化したと。」

そして藤堂氏は太古中国語に唇音韻尾bの存在注11が想定できるとして、上古に押韻した侵談と蒸中東陽の関係を次のように考えられました（藤堂　昭和62：32）。

「（略）思うに太古の[-m]型には，om，um，ɵm（編者原註），ɒm及びəm，am等の豊富な主母音があったが，多少とも円唇的な後舌母音は韻尾[-m]との間に異化作用を起し，[-m]＞[-ŋ]の変化を促したが，非円唇的なəm，amだけはそのまま保存されたのではあるまいか（陰類・入類では幽之侯等の-b,-pが-ɡ,-kに変る）。

次に周秦方言で蒸中東陽が[-m]型であったとすると，陰類・入類の之幽侯魚（筆者注：əg/ək,og/ok,ug/uk,ɒg/ɒk）等も[-b][-p]型であったにちがいない。また宵部に陽類（筆者注：仮想のɔŋ）がなく，侵談に陰類（筆者注：əb/ab）がない。故に宵部を侵談の陰類にあてると，上古音系全体に空欄のない体系が成立する。（略）」

このように藤堂氏は唇音の陰類にbを考えることで、上古音全体に空欄のない体系注12が成立すると考えられました。しかしこの藤堂氏の考えには問題があります。なぜならもし円唇的な後舌母音が韻尾mとの間に異化作用をおこして、陽類omがoŋ（上古中部）に変化した（藤堂　1980：33の表4）と考えるのであれば、oと同じく円唇母音であるɔにも異化作用が起こり、ɔm→ɔŋの変化がおきたのではないでしょうか。また上の引用中に「陰類・入類では幽之侯等の-b,-pが-g,-kに変る」とありますが、om→oŋ（中部）への変化は同じ鼻音なのでその変化はありそうにみえますが、円唇後舌母音のoが韻尾p/bとの間に異化作用を起こしてop→ok/ob→og（幽部）の変化が起きるのでしょうか。藤堂氏はom→oŋの変化を異化作用というばかりで何の音声学的な説明もされていず、藤堂氏の異化作用説を受け入れるのは難しいでしょう。

さて詩経における侵談部と蒸中東陽部の通押を説明するために上古中国語に唇音韻尾bの存在を考え、蒸中東陽部が侵談部と同じmであったとする藤堂説（陽類om→oŋなどの直接的な変化を考える）には問題があることをみてきました。しかし蒸中東陽部が侵談部と同じmであったとみる藤堂氏の考えは詩経における不思議な押韻を説明できるすぐれたアイディアに間違いないでしょう。

そこで藤堂氏のアイディアを生かすために頼氏の「上古中國語の喉音韻尾について」（頼　1989：139-154,また155-172）の論文をみてみることにします。

頼氏は中古の深咸摂（唇音韻尾m）や山臻摂（舌音韻尾n）の韻数に比べて、通江宕梗曽摂（喉音韻尾ŋ）の韻数が不自然に多いことに注意を向けられました。そして上古の喉音韻尾を幽・中・侯・東・宵部のⅠ類と佳・耕・之・蒸・魚・陽部のⅡ類にわけると、そのⅠ・Ⅱ類の違い注13が中古の通江摂と宕梗曽摂の違いに反映していることに気づかれました。

そして上古でのⅠ・Ⅱ類の違いは次のようであると推定されました（同書：146）。

「　Ⅰ類：-ɡw,-kw,-ŋw　　唇音化された軟口蓋音（筆者注：ɡはg）

Ⅱ類：-ɡ,-k,-ŋ 　　　軟口蓋音

または

Ⅰ類：-ɢ,-q,-ɴ　　　 口蓋垂音

Ⅱ類：-ɡ,-k,-ŋ　　　 軟口蓋音」

頼氏はその後、Ⅰ類にたいする考えを次のように改められました（同書：158）。

「Ⅰ類の韻尾は前にuを伴う口蓋垂音と考えられる。そしてこのuは主母音ではなく，むしろ韻尾に属するものであるから，これを渡り音と考えṷと記した方が適當であろう。以上によってⅠ類の韻尾（所謂る合口的な喉音韻尾）は-ṷɢ,-ṷq,-ṷɴであると推定し（原注5）、前論の所説（-ɡw,-kw,-ŋwまたは-ɢ,-q,-ɴ）はこの點を訂正する（原補1）。」

＊原注5については注14。原補1については注15。

そこで頼氏の2種の喉音韻尾というアイディアを生かすために、カールグレン以来の上古唇音韻尾（陽類）をmとみる通説を破棄することにします。そしてそのかわりに詩経時代の上古唇音はm（侵談）とŋ（蒸中東陽）にいまだ分化していない、mではない、しかしmによく似た不明の鼻音Mcと考えます。そしてそのMcは中古（切韻時代）にはm（深咸摂）とŋ（通江宕曽梗摂：ただし梗摂はいまのぞく）に変化したと考えます。つまり上古の唇音韻尾をmではなく、Mcから中古m（深咸摂）とŋ（曽宕江通摂）への分化を考えることで、詩経における侵談と蒸中東陽の押韻（Mc→m/ŋ）を説明できるでしょう。

ではこの上古Mcは通説の唇音の鼻音mとはどのように違っていたのでしょうか。そこで頼氏によるⅠ・Ⅱ類の違いをuŋ/ŋと考えると、上古Mcから中古への変化をMc→m（侵談部の後裔）とMc→uŋ（Ⅰ類：中東部の後裔）/Mc→ŋ（Ⅱ類：蒸陽部の後裔）のように考えることができるでしょう。そして上古侵談・中東蒸陽部の介音zをふくむ主母音をx注16、またそれらの韻尾をMcとしてxMcをzəuMcと考えます。

すると介音をふくむ主母音と唇音韻尾は次のように変化したと想定できるでしょう。

上古　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　中古

┌→am（談部の後裔）

┌→xM*c*（侵談部）-----------------------┴→əm（侵部の後裔）

xMc（＝zəuMc）┴→xu*Mc*（中東蒸陽部）-┬→xu*M*c（中東部）┬→uŋ（東部の後裔）

　　　　　　　　　　　　　 　　　 |　 　　　　　　 └→oŋ（中部の後裔）

　　　　　　　　　　　　 　　 |　　 　　　　 └→ɔŋ（仮構の宵部）

└→x*M*c（蒸陽部）-┬→əŋ（蒸部の後裔）

└→aŋ（陽部の後裔）

＊主母音xは介音zをふくむ。ただし、xMc（＝zəuM）→xu*M*c/x*M*c、また主母音ə/aの分化以後の変化についてはのちの更新（一部次節）で考えます。

＊説明のためxu*M*c→ɔŋの変化がおきなかった仮構の宵部を追加してあります。

＊耕部は今回考察からはずしてあります。

このような変化注17を考えると、上古の侵談部と蒸中東陽部が押韻していたことをうまく説明できるでしょう。

では上のような変化をした上古唇音韻尾Mcとはどんな音だったのでしょうか。

1. 朝鮮漢字音の唇音韻尾について考える

前節では上古唇音韻尾をmではないある不明のMcと考え、詩経における侵（談）と蒸中東（陽）の押韻を説明してみました。

そこでこの節ではこの不明のMcの正体を探るために、朝鮮漢字音注18の唇音韻尾について考えることにします。

郷歌注19には末音添記注20とよばれる珍しい表記がみられます。たとえば均如伝（1075年）のなかの随喜功徳歌のなかの「」（小倉　昭和49：95）には「音」の字が付加された末音添記とよばれる「心音」の表記がみられます。

この「心音」について、小倉氏は次のように考えられました（同書：109）。

「は持格の助詞（郷歌第一の（17）参照）、はᄆᆞᅀᆞᆷ（筆者注：mʌzʌm）と讀む。「心」は一字でᄆᆞᅀᆞᆷであるが、「音」はその末音たるmを表はすために添加した字である。사ᄅᆞᆷを「人音」、구름を「雲音」とする類である。(略)」

＊「音」は中古侵韻影母ʔɪěm。現代音は「음2〔音〕[ɯm]名**1**音（略）。」（小学館・金星社共編　1993：1414）。

またこの末音添記については、福井氏も「その（筆者補：「音」字の）字音（ɨm）を利用して，末尾がmで終わる語であることを示している」（福井　2013：180）とみられています。そして「どれが語彙的意味を表わす要素で，どれが文法的意味を表す形式であるかの境界が見分けやすくなっている。」（同書：180の原注2）とその末音添記の効用を述べられています。

そこで末音添記字「音」が添記された理由が韻尾のmを表記するためのものであるか否かを考えるために、「心（音）・人（音）・雲（音）・春」の漢字音とその固有語（訓）との関係をみてみると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 韻鏡 | 雞林類事麗言攷 | 伝統漢字音 | 末音字の有無 | 現代音 |
| 心 | 侵韻siĕm | 心曰心音尋sim | simL | 心音ᄆᆞᅀᆞᆷmʌzʌM | 마음[maɯmマウム] |
| 人 | 眞韻ɪĕn | 人曰人sin | zinL | 人音사ᄅᆞᆷsarʌM | 사람[sa:ramサーラム] |
| 雲 | 文韻ʮïuən | 雲曰屈林kurɯm | 'unL | 雲音구름kurɯM | 구름[kurɯmクルム] |
| 春 | 諄韻ɪuĕn | 話語はpom | chiunL | 「音」の添記無し | 봄[pomポム] |

＊韻鏡：藤堂・小林　昭和46：101,59,65,61。

＊雞林類事麗言攷：前間　昭和49：240,219,172,189。ハングルは筆者の翻字。

＊伝統漢字音：伊藤　平成19（資料篇）：120,162,172,168。

＊現代音は小学館・金星社共編　1993：641,960,199,880。

＊「音」は侵韻ʔɪěm。「尋」/「心」：ziĕm/siĕm（心邪声母の違い）。

＊末音添記字の有無は郷歌（小倉　昭和49：242）より判断。

＊Aの「話語はpom」は注21。

このように郷歌の随喜功徳歌（小倉　昭和49：95）には「心音・人音」、また讃耆婆郎歌（同書：172）には「白雲音」などと「音」の末音添記がみられ、それにたいして得烏谷慕郎歌注22（同書：149）の「去隠春～」には「音」の添記字がみられないという違いがみられます。しかしこれらの「雲」と「春」はともに単純語で、字音は'unL/chiunL、固有語はkurɯm/pomで、それらの韻尾はどちらも同じですが、末音添記のあるなしの違いがみられます。そこで末音添記字の「音」がただ単に末音のmを示すためというのであるなら、同じ条件にあるとみられる「白雲音」には「音」が添記され、「去隠春～」には「音」が添記されないのはなぜかという疑問がわいてくるでしょう。

そこで末音添記の「音」は末音のmを示すためであるという考えをすて、それらの有無は音声的な韻尾の違いと考えます。そこで「心」の韻尾はmʌzʌmのm、それにたいして末音添記の韻尾はmにまぎれるMkと考え、「心音」はmʌzʌMkと考えることにします注23。

そこでこの韻尾Mkの正体を探るために、訓民正音（1446年頒布）の例義にみえる連書の規定を次にみてみます注24（趙訳注　2010：21）。

「〔10〕字は初声字をそのまま用いる。ㅇを唇音字（ㅂ、ㅍ、ㅃ、ㅁ）の下に連ねて書けば唇軽音（筆者注：中国語の軽唇音）を表す字（ㅸ、ㆄ、ㅹ、ㅱ）になる。」

＊唇軽音（ㅸ、ㆄ、ㅹ、ㅱ）は斜体の*P*/*P*h/*B*/*M*と翻字します。

ところで訓民正音頒布より2年後の「ハングルを利用した最初の韻書」（金東昭　2003：122）である東国正韻にもこの連書はみられます。

そこで東国正韻の終声表記に使われているㅱとㅇの連書を次にみてみます。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | 韻鏡 | 東国正韻(伝統漢字音) | 初声 | 中声 | 終声 |
| w系 | 效摂 | 高（豪韻kau平） | 고ᇢ平ko*M*（koL） | ㄱk | ㅗo | ㅱ*M* （w） |
| 好（晧韻hau上） | 호ᇢ上ho*M*（hoR/H） | ㅎｈ |
| 道（晧韻dau上） | 또ᇢ去tto*M*（toR） | ㄸtt |
| 流摂 | 鳩（尤韻kɪəu平） | 구ᇢ平ku*M*（kuL） | ㄱk | ㅜu |
| 流（尤韻lɪəu平） | 류ᇢ平ryu*M*（riuL） | ㄹｒ | ㅠiu |
| ゼロ/j系 | 果摂 | 歌（歌韻ka平） | 강平ka’（kaL） | ㄱk | ㅏa | ㅇ’  （’） |
| 蟹摂 | 快（夬韻khuăi入） | 쾡去khoai’（khoaiH） | ㅋkh | ㅗoㅏa ㅣi |

＊韻鏡（ローマ字）：藤堂・小林　昭和46：74,75,74,98,99（小韻「劉」）,78,52。

＊東国正韻（1448年刊）：建國大學校図書館蔵　1973：332,343,336,368,391,518,467。

＊伝統漢字音：伊藤　平成19（資料篇）：79,82,82,98,99,1,45。H/Lは高・低調。

＊終声（ㅱ）の翻字*M*は筆者。wは姜氏による。表は姜　1993：99を準用。

上の東国正韻のハングル表記にたいして、姜氏は次のように考えられました（姜　1993：99）。

「中古音の/-aw/と/-əw/は，韓国漢字音で各々/-o/と/-u/に変化して，韻尾の/-w/が主音に吸収されたのに，『東国正韻』では韻尾（終声）として，-w系字音の終りにㅱ[w]字を表記した。そして-zero系と-j系字音の終りにはㅇ[zero]字を付け加えた。これは，字音は必ず初・中・終声を具えていなければならないと考えていた結果から出たものである。」

そこで上の姜氏の考えでは效摂「高」（豪韻kau）の韻尾uが主母音aに吸収されoに変化（au→o）して、その終声ㅱ[w]の表記は訓民正音に初・中・終声をそなえている必要があるとの規定注25があるためであり、特に表記する必要もないものであったことになります。

そしてこのような考えは以前に河野氏が東国正韻の「고ᇢ平　高」（ko*M*）の終声ㅱ（*M*）を人為的な添加であるとみて、東国正韻にたいして全く否定的な考えを述べられたことにさかのぼります注26。しかし東国正韻の終声表記ㅱ（*M*）は河野氏が考えられたように本当に必要のない人為的な表記だったのでしょうか。

ところで東国正韻よりやや遅れて刊行された弘治五年朝鮮板伊路波（1492年刊）をみると、日本語の「わ・む・う・内」にたいする音注が次のようにみられます注27（京大國語學國文學研究室編　昭和40.7：3,3,3,10）。

「四體字母各四十七字」：「わ　音와（’oa）」「む　音무（mu）」「う　音ᄝᅮ（wu）」

「別作十三字類」：「内　音우디（’uti）」

　＊「音와」などは割注。（　）内の浜田氏による翻字は筆者補。

このように弘治五年朝鮮板伊路波には日本語のウにたいして、ᄝᅮと우の2種の表記がみられることから、この2種のウは同音なのか、あるいはまた違った別の音であるかという問題がでてくるでしょう。

この問題にたいして、浜田氏は次のような考えをだされました（同書：伊路波解題24）。

「（上略）私はあとの「内」に対して捷解新語と同様’uをあてていることなどから考えても、これはやはり外国語を写すと言う意識があった為に、中国語の微母を表わす為にしか用いられない諺文（筆者注：ㅱ）をわざわざ使ったまでで、実際の発音はやはり’uで表わさるべきものと変りはなかったと考えて差支えないと思う。（略）」

＊「上略」にはㅱを微母とみる河野氏の考えが紹介されています（注28）。

このように浜田氏はᄝᅮ（*M*u：濱田氏のwu）と우（’u）には違いはなく同音とみられました。しかしこれらの音に違いはないとすれば、なぜ二つの違った表記がみられるのかという素朴な疑問がでてくるのも当然のことでしょう。

ところで上の弘治五年朝鮮板伊路波（1492年刊）とほぼ同じころ、首里方言が記録された語音翻譯注29（1501年）にも連書字ㅱ（*M*）が次のようにみられます（伊波　1974：58）。

「我是日本国的人ᄝᅶᆫ야마도피츄（wan yamatʋ　fich‘ʋ）」

\*上のᄝᅶᆫは以下、*M*oanと翻字します。

このᄝᅶᆫ（我）は現代首里方言の「’waɴ⓪（名）わたし。私。（略）」（国立国語研究所編　昭和51：590）」の先祖とみられます。そこでㅱ（*M*）とㅇ（’）を別音（近似音）とみると、語音翻訳のᄝᅶᆫ（*M*oan）の後裔が現代首里語の’waɴとみられることから、首里方言の「わたし」はᄝᅶᆫ（*M*oan）→완（’oaɴ）→’waɴのように変化したと考えることができるでしょう。

ではᄝᅮ（*M*u）は우（’u）と同音ではなく近似音とみれば、우（’u）に変化するまえのᄝᅮ（*M*u）とはどんな音だったのでしょうか。

そこで訓民正音の初声字ㅇがどんな音であったのか知るために、訓民正音の制字解と終声解の規定を次にみてみることにします（趙訳注　2010：35-6,83）。

1. 制字解：

「〔15〕（略）唯一、牙音のㆁ（筆者注：ŋ）は舌根が喉をふさいで音声と気息が鼻から出るけれども、その音声がㅇ（筆者注：’）と似かよっているために、中国の韻書では「疑」の頭子音（[ŋ]）と「喩」の頭子音（[j]）を多くは混同して用いている。（略）」

1. 終声解：

「〔40〕なおかつ、ㅇは音声が淡くてろなので、必ずしも終声に用いる必要はなく、中声で終らせても音節をなすことができる。（略）」

そこで「淡くてろで、ㆁ（ŋ）と似ている」と訓民正音で規定されたㅇ（’）にたいする福井氏の考えを次にみてみます注30（福井　2013：11）。

「まず現代語と同じようにゼロ子音（筆者注：ø）として用いられる場合は’で転写し，有声軟口蓋摩擦音（筆者注：/ɣ/。/x/は無声軟口蓋摩擦音）として用いられる場合にはɣで転写することにする。」

ところで訓民正音でㅇ（’）にたいして似ているとされたㆁ（ŋ）は東国正韻にもみられます。

そこで弘治五年朝鮮板伊路波の終声ㅱ（*M*）とそれにたいする東国正韻の表記を比べてみると、次のようになります。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 中古音 | 弘治五年朝鮮板伊路波 | 東国正韻 | 伝統漢字音  /現代表記（音） |
| 1492年 | 1448年 |
| 梗摂平声3等庚韻見母（kɪɛŋ） | 京 音교ᇢ（kyo*M*） | 겨ᇰ平（kyəŋ） 京 | kiəŋL/경[kjɔŋ] |
| 宕摂上声3等養韻禅母（ʒɪaŋ） | 上 音ᅀᅣᇢ（zya*M*） | 쌰ᇰ去（ssyaŋ）上 | siaŋR/상[sa:ŋ] |
| 效摂平声1等豪韻見母（kau） | - | 고ᇢ平（ko*M*）　高 | koL/고[ko] |

＊（　）内は韻鏡（藤堂・小林　昭和46：90,87,74）。

＊「音교ᇢ/音ᅀᅣᇢ」は割注。（　）内の翻字は筆者。

＊弘治五年朝鮮板伊路波：京大國語學國文學研究室編　昭和40.7：4,4,-。

＊東国正韻：建國大學校図書館蔵　1973：132,110,332。

＊伝統漢字音：伊藤　平成19（資料篇）：205,186,79。

＊現代表記（音）：小学館・金星社共編　1993：113,1006,130。

上表からわかるように弘治五年朝鮮板伊路波にはのちに使われなくなったㅱ（*M*）やㅿ（z）が使用されています。そこで東国正韻の刊行よりも約50年ばかり遅い弘治五年朝鮮板伊路波のほうが古形を表記していると考えると、「京・上」はkyo*M*→kyəŋ→kiəŋL、zya*M*→ssyaŋ（濃音）→siaŋR→sa:ŋのように変化したと考えることができるでしょう。

そこで連書字ㅱ（*M*）に関係する諸書の表記をまとめると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 郷歌 | 東国正韻 | 弘治五年朝鮮板伊路波 | 語音翻訳 | 倭語類解 |
| 1075年 | 1448年 | 1492年 | 1501年 | 18世紀初 |
| 表記 | 心音 | 고ᇢ平（ko*M*）　高又誥韻  겨ᇰ平（kyəŋ） 京 | う　音ᄝᅮ（*M*u）  内　音우디（’uti）  京　音교ᇢ（kyo*M*） | 我  ᄝᅶᆫ（*M*oan） | 梅  ᅃᅮ몌（’mumj）  京　경（kyoŋ） |
| 発音 | mʌzʌMk | ko*M*/kyəŋ | *M*u・u/kyo*M* | *M*oan | （mme） |

＊末音添記「音」：中古侵韻ʔɪěm。「梅」（灰韻muəi）。（　）内の翻字は筆者。

＊ɴ：口蓋垂鼻音（/ɴ/）。

＊「梅　ᅃᅮ몌」「京　경」：京大国語学国文学研究室編　昭和33：本文125,169/217。

＊「梅　ᅃᅮ몌」については注31。「京　경」については注32。

＊「倭語類解　國語表記諺文假名對照表」には「ッㄷ（t）/んㄴ　ㅁ（nmの連書）」（同書：解説6）の表記がみられます。

さてこのように連書字ㅱ（*M*）は東国正韻、また弘治五年朝鮮板伊路波さらには語音翻譯といった同時代の外国語表記にみられことから、ㅱ（*M*）は不必要な人為的表記ではなく、必要とされたある不明の音を表わすための表記と考えられてくるでしょう注33。

ところで通説では「京」（開口3等庚韻見母kɪɛŋ）は「kïăŋ（上古陽部）→kïɐŋ（中古庚韻3等）」（藤堂　昭和42：82）のように変化したとみられています。そこでkïăŋ（上古）→kïɐŋ（韻鏡時代）→kyo*M*（伊路波）→kyəŋ（東国正韻）→kyoŋ（倭語類解）のような変化を考えると、ŋ→*M*→ŋのような先祖返りの変化を考えなければならず問題が起こるでしょう。

この問題は後々ゆっくり考えるとして、弘治五年朝鮮板伊路波、語音翻訳や東国正韻、また郷歌の末音添記によって、次のような変化を想定することができるでしょう。

1. *M*（ㅱ）→’（ㅇ）

A.伊路波のウの表記：ᄝᅮ（*M*u）→우（’u）

B.語音翻訳の「我」の表記：ᄝᅶᆫ（*M*’oan）→완（’oan→’wan）

C.東国正韻の「高」（豪韻kau）：ko*M*→koL（現在）

D. mʌzʌMk（郷歌「心音」）→mʌ’om（雞林類事「心」）→ma’ɯm（現在「心」）：Mk→m

　＊’（ㅇ）：ゼロ子音（ø）は服部氏の「ゆるやかな声たて」（注30）と考えます。

ここから古代～中期朝鮮語の唇音韻尾Mkと上古中国語の唇音韻尾Mcとの関係を考えることにします。

第2節で考えたように、「高」（豪韻kau）の（介音を含めた）主母音をaではなくxとして、「高」注34の上古音をkxMcと考えます。そしてkxMc→kxMc6→kxMc10（cは世紀の略）と変化した中国語「高」（kxMc10）を借入した朝鮮漢字音「高」は15世紀にko*M*7へ変化したと考えます。また郷歌（10世紀頃以前）の「心音」の韻尾はmではないMk10であったと考え、「心音」をmʌzʌMk10とみます。

このように10世紀の「高」をkxMk10、また「心音」をmʌzʌMk10と考えると、それぞれの音は次のように変化したと考えることができるでしょう。

　　　 　　　　上古　　中古　　 9～10世紀頃　　15世紀　　　　　 現在

中国語「高」　　：kxMc--→kxMc6---→kxMc10--------------------------→gāu（拼音）/kɔ53

　　　　　　　　　　　　　　 　　　⬇（借入：同音）

　古代～中期朝鮮語「高・心」：　 　　kxMk10---------→ko*M*（東国正韻）→koL（高）

　　　　　　　　　　　　　　　　　 mʌzʌMk-------------------------→ma’ɯm（心）

「心音」（郷歌）

　＊ここでは「心音」をsiMkではなく、通説のmʌzʌMkで考えてあります。

＊gāuは拼音。「kɔ53」（湯等編　1997：89）は寧波方言。声調符号は数字で代用。

さて前節では上古中国語のMcはm（侵談部の後裔）とuŋ（中東部の後裔）/ŋ（蒸陽部の後裔）に変化していると考えました。

そこで中国語の「心・高」と古代～中期朝鮮語の「心音・高」の韻尾を次のように比較することができるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 「心」「心音」の変化 | 「高」の変化 |
| 中国語 | Mc→Mc6→Mc10（心）---→m（心） | Mc6→Mc10（高）→ɔ53（寧波方言） |
| ⇓（借用）　　　　 　　　　⇓（借用） | | |
| 古代～中期朝鮮語 | Mk10（心音）→ɯm（心） | Mk10→o*M*--→oL |

＊上古の陰類は-g,-d,-bではなく、わたり音uを考える頼氏のアイディアを準用し、介音zをふくむ主母音をxとして、10世紀の朝鮮漢字音の「高」をkxMk10（＝kzəuMk10）と考えてあります。

そこで中国語の「高」が古代朝鮮語に借用されたときの韻尾（Mc10＝Mk10）、あるいは15世紀の東国正韻のko*M*の韻尾*M*のどちらか一方でもその音価がわかれば朝鮮漢字音「高」の変化（kxMk10（＝kzəuM k10）→ko*M* k15）から、中国語の中古音韻尾Mc10の音もわかり、そこからMc10の先祖である上古の唇音韻尾Mcもわかってくるのではないでしょうか。

次節では上古の唇音韻尾Mcの音価を探るために、日本語の「梅」の発音を考えることにします。

1. 「梅」の発音を考える

「梅」は万葉集に「烏梅・有梅・梅」注35などとみえ、その後「牟女」（本草和名）や「宇女」（和名抄）の表記がみられます。また『塵袋』（1274-81年頃成）には「一　楊梅トカキテハ、カラムメ（筆者注：唐梅）トヨムヘシ。」（正宗編　昭和52（覆刻）：上巻129）と「ムメ」の表記が、さらに17世紀初めの日葡辞書に「Vma.ウマ（馬）　馬」「Vma.ウマ（午）」「Vme.ウメ（梅）」（土井・森田・長南編訳　1980：691,691,692)の表記がみられ、江戸中期の与謝蕪村（1716-1784）の句「梅咲きぬ どれがむめやら うめぢややら」にも「むめ」と「うめ」の表記がみえます。このように「むめ」の表記は明治近くまでみられ注36、現在は「」の表記となり、その発音は「東京ウメ[ɯ]/京都ンメ[]（平山輝男編　平成4：1巻661,661）となっています。

ところで亀井氏には上の与謝蕪村の句を冠した論文注37があります。

そのなかで橋本氏の『キリシタン教義の研究』の中でふれられたロドリゲスのVの発音について、亀井氏は次のように引用されています注38（亀井　平成4：300-2）。

「一　語頭のv（改行）「うま」（馬）「うまる」（生）の「う」は、現今ではmと發音して、ふつうの「う」とは音が違つて居る。然るに、此の書では、「うま」「うまる」の「う」もvで寫して、「うし」（牛）「うたがひ」（疑）などの普通の「う」と區別がない。（略）此の書の編者は、日本のヅ音にzzuのやうな異様な綴字を宛てゝ憚らなかつたのであるから、（略）普通のu音に誤讀する虞あるvを用ゐたとは考え難く、又假名遣に於ては、當時は「う」よりは「む」と書くのを正しいとして居たのであるから、假名の用法に随つてvを宛てたとも想はれないから、やはり、當時u又はuに近い音と考へて、v字を宛てたものと解すべきであらう。」

＊亀井氏は原著（橋本進吉　昭和36：234）より引用されています。

また亀井氏は室町後期の『新撰仮名文字遣』（吉田広典著　1566年）の一異本にみえる記述を次のように紹介されています注39（亀井　平成4：306）。

「一　かしらのむのじをうとよむこと　口をむすびて読めばうなり（この一行のみ私に濁点を施す）

　　むもれ木　むへ山風　むは祖母

　　むま馬　むまれきてなと（原注ド）の類」

＊上の「（この一行のみ私に濁点を施す）」の注記は筆者ではなく、亀井氏自身の注。

そこでこれらの中世の「むめ」などの表記にみられる語頭のムを亀井氏は次のような自響音[ṃ]注40であると考えられました（同書：319）。

「わたくしは第一拍のその実質、自響音[ṃ]をまんにょうがなの場合にはウのかなをもって同定したものと解釈する。すなわち、わたしは奈良時代このかた一貫して「うま」「うめ」のたぐいの語頭音は、すくなくとも口母音のウではなかったものと仮定する。」

＊またこの語頭のウを亀井氏は「ウでもないムでもない語頭の″鼻音拍″」（上書：320）と考えられています。

そこで亀井氏の考えられた自響音を仮にmと考えると、「梅」は平安から江戸の終わりころまで（日葡辞書のVmeを別にすれば）一貫してmme（ムメ：第2音節メはmeで代用）に近い音であったとみられるでしょう。

ところで「梅」は中国からの渡来植物とみられ、奈良時代には「烏梅」注41 と表記されています。そこでこの「烏梅」の音を考えることにします。

大野氏は「日本書紀の清濁表記（異例の考察）」のなかで、『觀智院本類聚名義抄』（11世紀末～12世紀）にみられる、仮名にふられた右肩のレ点の用法に種々のものがあると述べられています（大野　1953：123-4）。

いまそのレ点の用法を筆者が簡略にまとめなおすと、次のようになります注42。

a. 字音のŋ韻尾。例：「恭　禾クウレ（僧上四丁ウ）」

b. 濁音節を示す。例：「餓　禾.カレ（僧上五五丁ウ）」

c. マ行音の前のの鼻音の存在。例：「夢　禾ムレ·ウ（僧上二五丁オ）」

d. 母音ウが、極めて鼻母音的であつたことを示す。例：「烏　禾ウレ（僧中六六丁ウ）」

＊「禾」は和音のこと。丁数は大野氏記載のもの。

＊レ点の位置などは『類聚名義抄（觀智院本）』（天理圖書館善本叢書編　昭和51：僧上5ウ, 僧上56ウ,僧上26オ,僧中67ウ）により、横書きに改めるために筆者がなおした。

＊「恭」：通摂鍾韻見母kɪoŋ。「餓」：果摂箇韻疑母ŋa。「夢」：通摂送韻明母mɪuŋ。「ム・ボウ/mbɪuŋ」（藤堂編　昭和53：300）。「烏」：遇摂模韻影母ʔo。藤堂・小林　昭和46：2,78,26,49。

そして大野氏は上のレ点の重大性について、「これは濁音及び鼻音音節の語頭の鼻音的グライド及び、上代母音の鼻母音的要素の存否、或は濃淡を考へる上に一つの示唆を與へる事實であることだけは疑ひない。よってここに記して後考を俟つこととしたいと思ふ。」（大野　1953：125）として、考察をおわられています。

ところで橋本氏には「國語に於ける鼻母音」という小論のなかで、鼻母音の存在について、次のように述べられています（橋本進吉　1950：5）。

「濁音の前の母音鼻音化の現象が、古く我が國に存した事は、右の西洋人の記録以外にはまだ見出されず、假名で日本語に書いたものにも全くあらはれて居ない。（略）我々は、右のロ氏の語典（筆者注：ロドリゲスの『日本大文典』〈注43〉）を根據として、室町末期に近畿、其他の國々に右のやうな鼻母音があつた事を信じてよからうと思ふ。さすれば、（以下、注44につづく）」

ところで中国語の「梅」の音は上古音muəgから中古muəi（藤堂編　昭和53：649）へと変わったと考えられています。そこでこの考えを認めると、中国から「梅」を移入したのが5～6世紀頃と考えれば、その移入時の「梅」の発音はmuəiに近かったとみられます。そして8世紀の万葉集には「烏梅」（「烏」は模韻影母、韻鏡で/ʔo/）の表記がみられます。そこで「烏梅」をũme注45（いま「梅」はmeとして）のような音であったとみると、中国語の「烏」（ʔo：/ʔ/は声門閉鎖音）と日本語の鼻母音ウ（ũ）との違いが問題になるでしょう。

さて万葉集の「烏梅」と日葡辞書のVmeのVはともにウに近い音を表記したとみられるので、これをウもどきの音Uと考えます。また弘治五年朝鮮板伊路波ではウにたいしてᄝᅮ（*M*u）の表記がみられ、このᄝᅮの初声はㅇ（’）ではなく、ㅁ（m）を準用したㅱ（*M*）で表記されているので、ムに近い音だったと考えることにします。また倭語類解（洪舜明撰18世紀初頭）においても「梅」はᅃᅮ몌（’mumyəi）とムメに近い表記がなされているので、「梅」はムメに近く聴きとられていたと考えられます。そこでムメと表記された「梅」の第一音節の音はmに近い音であったと考えることができるので、この音をムもどきの音Yと考えます。すると「梅」はウもどきのウメ（Ume：烏梅）から10-15世紀にはムもどきのムメ（Yme）に、さらに17世紀のウメ（Vme）から蕪村のムもどき（Yme）に、そして現在のɯme/mmeに変わったとみることができるでしょう。

そこで文献にみえる「梅」の表記と発音の関係を考えると、概略、次のようになるでしょう。

万葉集　 本草和名　塵袋　　　 日葡辞書　蕪村　　現在

601年　　　8世紀　　918年　　1274-81年 1603年　 18世紀　21世紀

中国語「梅」：muəi

表記　　　　：└（借入）→烏梅----→牟女---→ムメ------→Vme----→ムメ--→ウメ

発音　　　　　　　　　　　U8me----→Y10me---→Y13me------→U17me---→Y18me--→ɯme/mme

＊ムメもどきの音はY10me/Y13me/Y18me。ウメもどきの音はU8me/U17me。下つき数字は世紀。

＊「烏」：模韻影母ʔo。「梅」(小韻「枚」は莫杯切；陳等重修　民国80：96)：灰韻明母muəi。「牟」(小韻「謀」は莫浮切 ；同書：211)：尤韻明母mɪəu。「女」：語韻嬢母ṇɪo。藤堂・小林　昭和46：49,52,98,46。

＊現代の東京方言は「ウメɯ」、また京都方言は「ンメ」（平山輝男編　平成4（１巻）：661,661）。

さて「梅」の表記はウメもどきからムメもどきと変化していますが、Ume（ウメもどき）とYme（ムメもどき）の音とはどのような音だったのでしょうか。

ところで亀井氏は「本来の日本語としては、マ行に属する単位のうち、マとメとモとのまえにはウとムとがともに立ちえない。（略）」（亀井　平成4：335）という特性（注39の契沖の『和字正濫鈔』の記述）を取りあげ、「梅」の頭音ウとムとの関係を次のように考えられました（同書：337）。

「当該の事例においては、Aの音とのB音とのいずれにてもあらぬCの音がそこにのみに現れるという意味において、この現象こそAとB音との対立のその″中和″と呼ばれるにふさわしい（ものに思われる）。（略）」

このように亀井氏は「梅」のウ（A）やム（B）とは異なる「いずれにてもあらぬ」音（C）注46を中和という言葉で表現されたのですが、この中和したC音とは何だったのでしょうか。そこでこの不思議なCをさがすために、亀井氏がいわれるように「魔法の靴をはいて千年の昔の平安京の都大路を練りある」（上書：344）くことにしましょう。

『古今和歌集』（紀貫之など撰：913年ころ成）に「ウトムトノ間（筆者注：アハヒ）ヲヨム」という注記が次のようにみられます（同書：346の写真版）。

「秋ノ歌ノ下（略）文屋や須ひ天゛（筆者注：康秀。平安時代前期の人、六歌仙）

吹くからに秋の草木の志ほぬれ八゛をあらしとい婦らん」

＊小倉百人一首22番歌。

　そこで「ウトムトノ間ヲヨム」という古今和歌集の書き込みから、ウメもどきの「梅A」（Ume）とムメもどきの「梅B」（Yme）が中和した「梅」（C：Xme）の変化を次のように考えることができるでしょう。

Zj6e（梅j6）→Uj8me（烏梅j8）→Yj10me（牟女）→Yj17me（Vme）→Yj18me（ムメ）→ɯme/mme

＊中国語の原音「梅c6」（Zj6e）と日本語に借用された「梅j6」（mj6e）は同音と考えます。

＊「第9節　連書字ㅱについて考える」（～korean/korean2hp.docx）の注21参照。

この後も考察はつづけているのですが、前の更新から早や一年を過ぎてしまい、とりあえず今回はここまでとします。

1. おわりに

前回の更新（2023.9.22）の後、次のような構想のもと書きはじめました。

1. 日本寄語「天　天帝」の解読（「」（「」＋タ（接尾語））
2. 「」の発音
3. 中期朝鮮語の「心音」と東国正韻のㅱ（*M*）表記の関係
4. 上古における侵談部（通説m）と蒸中東陽部（通説ŋ）の通韻の問題
5. 頼説の唇音化された喉音韻尾（Ⅰ・Ⅱ類）の問題
6. 再び「烏梅」（梅）の発音
7. 上古唇音韻尾をMとし、そのM→m/uŋ・ŋの変化と「烏」の関係

その後、3ヶ月近く考察を進めたのですが、2023.12.13に「天　天帝」の解読で考えた接尾語タの問題、また4・5に関係する「天道ぼこり」の考察（注1参照）は今回とりやめることにしました。そして最初に4と5、次に3、そして2と6を考察し、7を考えるのが良いのではと考えるようになり、その日のうちに節の順序を変更しました。

8月ころにはこのまま考察を進めればすぐに来年になるだろうと予想されたので、更新をするための校正を始めることにしました。しかし今日まで考えに考えてしまい、更新がついに1年を過ぎてしまいました。

次回はこれまでに考察がおわっているところから書いてゆきたいと思っています。

2024.10.17

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ichhan

【注】

＊中国・韓国人名は日本語読み。

＊複製本や再版本がある場合も初版の注記（書名・出版年・版次など）はほとんど省略しあります。

1. その後、tentaXを直接オーストロネシア語族の＊t’inaɣ「光」と結びつけ、オーストロネシア祖語との同源を考えるアイディアが浮かびました。この考えは村山氏が琉球方言の「シナ」に「光・太陽」の意味を推定し、「シナ照る」を＊t’inaɣと結びつけるアイディア（前回のHPの注60）の拡張版といえるでしょうが、日本祖語taXとオーストロネシア祖語＊taNとの関係も追及する必要があるでしょう。

＊「ティダ」の語源を探る」（http://ichhan.sakura.ne.jp/tida/tida1.html）の「第6節　発光天体の語基について」（第7節も）。

なお日葡辞書（1603年刊）の「天道」には「太陽」の義はない（前回のHPの注56）のに、古今著聞集（1254年成）にはすでに「天道ぼこり」（日向ぼっこの意）がみられるのはなぜかという、日本寄語の「天　天帝」に残された問題（同じく注64）はのちの更新で考えることにします。

1. 上古中国語「Ⅰ類諸部の分部」にたいする清朝学者の説については頼　1989：159-161。その分部表は171-2。「上古～中古の韻母対照表」は藤堂　昭和42：77-89。
2. 中古音は「校正宋本廣韻附索引」（陳彭年等重修　民国80）。韻鏡音は「音注韻鏡校本」（藤堂・小林　昭和46）。以下、該当ページの反切・ローマ字による。
3. 「（（略）そして濁子音韻尾を持つ韻母を陰類といい，清子音韻尾を持つ韻母を入聲（筆者注：入類）といい，鼻子音韻尾を持つ韻母を陽類という）。（略）これが即ち「入（上例aṷq）を樞軸とする陰（aṷG）陽（aṷN）對轉の原理」である（原注5）。」（頼　1989：162）。
4. a.「切韻系韻書では近似した韻目同志をグループ別に配列してあることは，疑もない事実であるが，その最も整理された『広韻』において，最初に東冬鍾江の如き円唇後舌母音をもつ[-ŋ]型韻が並び，末尾に侵覃…凡の[-m]型9韻がある。孔広森はこれを評して，「東に始り凡に終るのは復始の意を寓したのだ」という。『広韻』が-m型韻と東鍾系諸韻（筆者注：-ŋ型韻）に何らかの親縁を認めているのは確実である。（略）」（藤堂　昭和62：39）。

b.「（上略）それのみか現代方言にもなおその痕跡がある。安徽南部の僻地婺源では，中古の東冬韻は今でも-m型である（羅常培「徽州方言的幾個要点」）。侵：蒸中東の通韻を方言なりと断定した江永は，此の婺源の産で，その鋭い洞察は恐らく自己の方言の観察から生れたにちがいない。（改行）（1954年，No.29）」（上書：40）。

＊第一類の《「耕」eŋ》（藤堂　1980：301）については今回は省略。

1. 一般的な鼻音の変化はCVm（両唇鼻音）→CVn（歯茎鼻音）→CVŋ（軟口蓋鼻音）→CVɴ（口蓋垂鼻音）→C（鼻母音）→CV（単純母音：鼻母音の消失）と考えられます。
2. 「（3）　明代の北方漢語†―《韻略易通＊》（1422）と《韻略滙通＊》（1642）（中略）　4）《易通》はなお-nと-mの韻尾の区別を認めている。（略）《滙通》はこの趨勢を反映して，旧-m型を-n型と合併している。例「甘」（旧kam）＝「干」（kan）,「藍」（旧iam）＝「間」（kian）,「兼」（旧kiem）＝「建」（kien）。（略）よって明代中ごろ以降の北方語では,-m型が消滅したと考えてよい。」（中国語学研究会編（藤堂明保）　昭和45：202）。それにたいして粤音系（南方系）には「-m・-n・-ŋ・-p・-t・-kの区別があり」（同会編（王育徳）：179）ます。
3. 「出　一スチ・シュツ　（入）質（術）　二スイ　（去）寘（至）」

「決　ケチ（クエチ）・ケツ（クエツ）　（入）屑」「夬　ケ（クエ）・カイ（クワイ）　卦（夬）」（藤堂編　昭和53：132,711,306）。

1. 「この仮説」とは胡適の古入声の考えを推し進めたカールグレンの考え（藤堂　1980：297-8）。
2. 濁声母で始まる音節については次のように考えられています。

「（上略）一般に有声音ではじまる音節の発端高度は下がる傾向があるから，（略）（筆者補：『慧琳音義』において）反切の上で全濁音が清音との混同を全く起こしていないのは，全濁音の持続部は殆んど無声化しても，出わたりのɦによる調値低下によって，清音声母との弁別が事実上つけられていたためであると了解される。上声全濁の去声への合流は，このような陰陽調分裂を媒介に起こった音韻変化である。（略）」（平山久雄　昭和42：162）。

1. 「これら（筆者注：藤堂氏が引用文中にあげられた「納」（合韻nəp）/「内」（隊韻nuəi）/「訥」（没韻nuət）や「葉」（葉韻(j)iɛp）/「世」（祭韻ʃɪɛi）など）はいずれも詩經時代に「祭月」・「至質」・「隊術」部に帰属するようになった字であるが，その諧声系中には部分的に，かつて唇音韻尾をもっていた痕跡が残っているのである。このようなことは主母音が/a//ə/であって，しかも去入類のときに限られることは，注目を要すると思う。

＜参考文献＞p.301の表では，「宵」部/ɔg/に対する陽韻がない。古い訓詁や諧声系で

は，「宵」部（筆者注：ɔg/og）は「緝」部（筆者注：əp）・「侵」（筆者注：əm）部と縁が深く，ある方言では/ɔb/であった可能性がある。（略）」（藤堂　1980：302-3）。

1. 陰類を濁声母（注10）とみる藤堂氏のp.301の表（藤堂　1980：301）を筆者が以下のようにまとめなおしました。ただし2類の舌音系は略し、1・3類のみ。また第1・3類の支部（eg/ek）・耕部（eŋ）は略。

第一類（喉音系）　　　　　　　　　　　　　　　　　　第三類（唇音系）

陰類：之・魚（əg/ag） 侯（ug）・幽（og）・宵（ɔg）←------ɔb（藤堂氏の仮構）

入類：之・魚（ək/ak） 侯（uk）・幽（ok）・宵（ɔk）　　　　緝・葉（əp/ap）

陽類：蒸・陽（əŋ/aŋ） 東（uŋ）・中（oŋ）・ɔŋは再構されず　侵・談（əm/am）

＊藤堂氏のɔb（仮構）の考えを←--で示した。頼氏のⅡ類とⅠ類は次注、本文参照。

1. 喉音韻尾Ⅰ・Ⅱ類の違い：

a.「（略）また陰類（即ち陰尾韻。中古で韻尾が母音かゼロの韻母）について，Ⅰ類は殆どuであるのに對してⅡ類は主としてiである。また陽類について，Ⅰ類は原則として韻書の先頭にある韻(東冬鍾江)であるのに對し,Ⅱ類は原則として韻書の中間にある韻(陽唐庚耕淸靑蒸登)である。」（頼　1989：156）。

b.「（35）通攝諸韻（特に江・覺も含める）が先頭におかれたのは遙かに最後の-m,-p諸韻相い應じさせるためだとする説（筆者注：注5a参照）がある。この場合，-m,-pと相い應ずるものとしては，-ŋ,-kよりは-ɴw,-qwの方が適當である。なぜなら-ŋw,-kw（筆者注：頼氏のⅠ類）は音聲學的に唇音（筆者注：m,p）とある近さを持っているからである。（服部氏上掲書p.133參照）。」（同書：153）。

＊服部氏上掲書（『音聲學』）には「（上略）多くの言語で[kω]（筆者注：kw）→[p]という音變化がおこっているのは，このためである。」（服部四郎　1951：133）とあります。江戸期の博多方言で「Quaxi（菓子）などをPaxi（ぱし）などといひ」とのロドリゲスの記述（土井訳注　昭和30：611）。また橋本氏は東干語についての話題のなかで、c→k→pの変化（第9表　子音の共起分析；橋本萬太郎　1981：186）を図示されています。

＊「第4節　上古中国語の喉音韻尾を考える」（～/japanese/japanese3hp.docx）参照。

1. 「（原注：筆者補）（5）　-Gは第4節の所説によって取り消さるべきである。」（頼　1989：167）との記述については、（原注：筆者補）（23）に「（略）そしてその渡り音（筆者注：引用中のṷ）と同じ母音を陰類平上聲の韻尾と考えるのである。（略）かくして陰類の濁子音韻尾（筆者注：-g/-d/-b）は全面的に取り消すことができる。」（同書：169-170）とあります。

そこで「中古では陽類〈筆者注：-ŋ/-n/-m〉（平上去）と入類〈筆者注：-k/-t/-p〉とが四声相配し、上古では陰類（とくにその去声）と入類とが自由に通韻する。」（中国語学研究会編（頼惟勤）　昭和45：117）ことにたいして、頼氏は次のように説明されています（頼　1989：167）。

「陰陽対轉は，陰類濁子音説（筆者注：通説は-g/-d/-b）によらないでも，共通の母音韻尾（渡り音を含む）によって十分説明可能である。

　かくしてⅠ類の韻尾は實は次のように推定される。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 陰類 | | | 入 | 陽類 | | |
| 平 | 上 | 去 | 去 | 上 | 平 |
| -u | -u | -u’ | -ṷq | -ṷɴ’ | -ṷɴ | -ṷɴ |

そしてこれに主母音｛a｝がついたものが侯東部であり，｛ə｝がついたものが幽中部であり，｛e｝がついたものが宵部であると推定する。（1957.4.24.）」

1. 「（補1）（略）即ち中國語上古韻尾に[-][-]のような二重調音子音を考えうる可能性がある旨の論及がそれである。（略）」（頼　1989：172）と、三根谷徹氏の學説（三根谷　1993：71-3）に啓発されて、頼氏はⅠ類の韻尾を-ṷɢ,-ṷq,-ṷɴに訂正されています。
2. 唇音韻尾について、藤堂氏は「主母音が/a//ə/であって，しかも去入類のときに限られ

る」（藤堂　1980：303）と述べられています（注11参照）。そこで上古侵談部の主母音（通説はə/a）をxとします。また頼説によってⅠ類の陽類にわたり音uを考え、介音zをふくむ主母音xにつづく韻尾をuMcと考えます。そして侵談部が侵部（əm）と談部（am）に分化するまえに、中古冬韻の先祖であるⅠ類の中部xuMcはoŋに変化したと考えます。その後、主母音x（ここではxに介音をふくめます）がəとaに分化した後も、Ⅰ類の中部は（xuMc→）oŋにとどまりɔŋ（仮構の宵部）には変化しなかったと考えます。それにたいして陰類（ただし、説明の便宜により通説のGc）と入類（Tc）はəとaに分化するまえに幽部に変化し（xuGc→ogとxuTc→ok）、その後、主母音xがəとaに分化したため、陽類は幽部（og）と宵部（ɔg）、また入類は幽部（ok）と宵部（ɔk）に分化したと考えます。このように考えればxがまだəとaに分化していないために、Ⅰ類の中部が（xuMc→）oŋであること、つまり上古に陽類のɔŋ（仮構の宵部）が再構されないという、いびつな韻分類となっていることを説明できるでしょう。次注参照。

＊通説の陰類韻尾Gは平声-uM/上声-uM/去声-u’Mと考えます（注14参照）。

＊Ⅰ類の中部xuMcがoŋに変化したことについては第3節の「高」の変化参照。

＊この問題の日本漢字音へのあらわれについては注34。

1. xは介音zをふくむ主母音、Yは陰類（通説はb,d,g）と入類（通説はp,t,k）の分岐以前の韻尾とします。そこでⅠ類の陰類を通説の濁子音b,d,gではなく、頼氏のように渡り音Uを考え、陰類をUM,UN,UŊ、また入類をP,T,Kとみます。そして陰類UM,UN,UŊと入類P,T,Kの分化以前の韻尾をYp,Yt,Ykと考えれば、陰類と入類への分化をxYc（xUM,xUN,xUŊ：陰入類分化以前）→陰類（zəU*M*,zəU*N*,zəU*Ŋ*）/入類（zəU*P*,zəU*T*,zəU*K*）→中古諸韻と考えることができるでしょう。この変化は陰類の鼻音的な渡り音Uは（介音zともども）主母音əに吸収されてoŋ（中部）/uŋ（東部）に、また入類の鼻音的な渡り音Uは（介音zともども）主母音əに吸収されて（zəUがo/uに変化し）入類P,T,Kは残存して、それら陰類と入類はその後中古諸韻に変化したと考えることができるでしょう。
2. 「韓国漢字音の形成時期を正確に知ることは難しいが、遅くとも科挙制度が確立した高麗の光宗王の時期（10世紀後半）には確立したと見ることができ、また、この頃に固定した漢字音は総じて韓国語自体の音韻変化規則に従いつつ15世紀漢字音へと継承されたであろう。原注11）」（金東昭　2003：32）。

ほかにも有坂氏の「第十世紀頃の開封音」（有坂　昭和32：325）とする説や河野氏の朝鮮漢字音の主要層を「b層即ち慧琳の拠つた唐代長安音」（河野　1968：204）とする説などがあります。

＊韓国語の時代区分は金東昭　2003：15の〈表1-1〉。ただし、このHPではハングル創制（1443）以前を古代朝鮮語、その後は中期朝鮮語とする河野説（河野　1968：15）を準用してあります。

1. 「現在伝わっている郷歌は『三國遺事』（13世紀後半）に載せられている「新羅郷歌」14首と、『均如傳』（1075年）に載せられた「普賢十願歌」11首以外に、『平山申氏世譜』の中の「始祖壯節公行蹟（1565年の記録）に収録された「悼二將歌」1首、合わせて26首である。原注22）」（金東昭　2003：38）。
2. 「第6節　郷歌の末音添記について考える」（～/korean/korean2hp.docx）。またその第2・3節参照。末音添記「音」の例は～/korean/korean2hp.docxの注14。

＊郷歌の「‘掌音’［千手観音歌］，‘道尸掃尸星利’［彗星歌］を‘손바당（筆者注：sonpataŋ）’、‘길ᄡᅳᆯ별（筆者注：kirpsɯrpyor）’と読むのは論理的におかしい。（略）。」（金東昭　2003：46）という批判があります。

1. 「年春夏秋冬同（略）년（nyən）（略）　츈（chyun）　このときも「春」の話語は（原注一）봄（pom）（略）　하（ha）（略）　츄（chyu）（略）도ᇰ（toŋ）（略）」（前間　昭和49：189-190）。（　）内の翻字は筆者。
2. 小倉氏の「得烏谷慕郎歌」の歌名は現在は「慕竹旨郎歌」。通用郷歌名と小倉氏の歌名の対照表は「備考１　郷歌26首の歌名対照表」（～/korean/korean2hp.docx）参照。
3. 郷歌の時代（とりあえず10世紀以前として）「嫉妬叱心音」が「嫉妬 s mʌzʌM」（嫉妬の心）であれば、なぜその後裔である現代語が「질투-심〔嫉妬心・疾妒心〕[tʃilthuʃim]名 嫉妬心」（小学館・金星出版社共編　1993：1645）であるのかという疑問が筆者にはわきました。

そこで通説では「嫉妬叱心音」を「嫉妬ㅅ ᄆᆞᅀᆞᆷ」（金完鎭　1980：180）とみるのですが、そうではなく「嫉妬叱心音」は古代中国語の「嫉妬之心」（漢書杜周傳；諸橋　昭和41：3巻746）の借用語で、それが郷歌にみられるのではないかと筆者は考えました。もしそうであるなら、この「叱」は中国語の「之」（之韻tʃɪei）の後裔のsʔ で、「嫉妬叱心音～」は「嫉妬sʔ siM～」と読むべきではないでしょうか。

＊東国正韻の「尸・之・叱」は「싱平（si’）/징平（ci’）/치ᇙ入（chirʔ）」（建國大學

校図書館蔵　1973：421,418,170）。（　）内の翻字は筆者。

＊「第3節　「叱」と「尸」の関係について」（～/korean/korean2hp.docx）のなかで、「「尸」（rʔ）→「叱」（sʔ）→語間字（s）→ㅅ（s：属格）→Ø（消失：濃音）」の変化を考えたので、上の「叱」をsʔとみてあります。

＊「第12節　「間のs」を考える」（～/korean/korean1hp.docx）参照。

1. 訓民正音解例本の制字解に、「〔17〕ㅇを唇音字（ㅂ、ㅃ、ㅍ、ㅁ）の下に連ねて書いて

唇軽音字（ㅸ、ㅹ、ㆄ、ㅱ）とするのは、唇軽音が軽い音で唇がさっと合わさり、喉の音声が多いからである」（趙訳注　2010：41）とあります。

＊唇軽音4種（ㅸ非母ｆ,ㆄ敷母ｆh,ㅹ奉母v,ㅱ微母ɱ→w）のうち、（以下、姜氏の注による）「朝鮮語音として存在するのは、「ㅸ」によって表記される[β]のみである。残りの「ㅹ、ㆄ、ㅱ」は朝鮮語の表記には用いられず、原則的にもっぱら中国語音などの外国語音を表記する際に用いられた。」（同書：41-2）。

＊「第4節　唇軽音を考える」（～/korean/korean1hp.docx）参照。

＊「第9節　連書字ㅱについて考える」（～/korean/korean2hp.docx）参照。

1. 制字解に「〔24〕（略）そもそも一字の音韻の要は中声にあり、初声と終声がこれに合わさって音節をなすものである。（略）」（趙訳注　2010：54-5）と、また終声解に「〔38〕終声は、初声・中声を受けて字韻をなす。（略）」（同書：80）とあります。

＊「第6節　終声字を考える」（～/korean/korean1hp.docx）参照。

1. 河野氏は「かやうに，東國正韻の字音は外見は極めて整然たる体系を示してゐるが，それは人為的な整理の結果であつて，この韻書の資料的価値を著しく低減せしめてゐる（略）従つてこれらの（筆者注：東國正韻の字音を用いた）文献は諺文制定後の文献としては最古のものであるにも拘らず，その字音は殆ど全く資料的価値が無い。（略）」（河野　1968：27）と考えられました。そして福井氏も「筆者も漢字音の歴史的な研究という意味では，これは当然であると考える。」（福井　2013：79）と河野氏の考えを受け継がれています。
2. 「う・わ・ま・む」の表記例。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 書史会要 | 朝鮮板伊路波 | 捷解新語 | 重刊改修捷解新語 |
| 1376年(陶宗儀撰） | 1492年(著者不明） | 1676年(康遇聖著） | 1762年(崔鶴齢改訂) |
| う　烏（模韻ʔo） | う　音ᄝᅮ（*M*u）  内　音우디（’uti） | うち（内）  우지（’uci） | うち（内）  우지（’uci） |
| わ　懐（皆韻ɦuʌi） | わ　音와（’oa） | わけ（訳）  와곙（’oakjei’） | わけ（訳）  와계（’oakjei） |
| ま　埋（皆韻mʌi） | ま　音마（ma） | うま（馬）  우마（’uma） | ま（間）  마（ma） |
| む　謨（模韻mo） | む　音무（mu） | む（無）　무（mu） | む（無）　무（mu） |

＊（　）内の中古音、また各書の翻字は筆者。

＊書史会要：京大国語学国文学研究室編　昭和40.7：73,73,73,73。

＊弘治五年朝鮮板伊路波：同書：3,10,3,3,3。その「伊路波合用言語格釋文」に「」（同書：伊路波合用言語格26）がみえます。漢字のルビは濱田氏の「伊路波合用言語格釋文」（同書：同釋文8上）による。

＊捷解新語：京大國語學國文學研究室編　昭和47.9：11上段,36上段,158上段,203上段。

＊重刊改修捷解新語：同書：12下段,223下段,112下段,233下段。

1. 終声ㅱ（*M*）にたいして、河野氏は次のように考えられています（京大國語學國文學研究室編　昭和40.7：伊路波解題35）。

「この微母（筆者注：ㅱ）の文字は中期語諸文献以降、朝鮮語を示すには全く用いられないが、中期語の文献では漢字音に用いられることがある。その字音は流摂及び効摂に属するもので、この両摂の字音の韻尾をこの微母で示している。例えば流をryuw、好をhowの如くである。（略）この（筆者補：東国正音の）微母の添加は流摂及び効摂の人為的標記に過ぎないのである。（略）この両摂の韻尾にw（筆者注：筆者の*M*）を用いたことはwの音価を推定するに貴重である、元来微母はmv-（このmは歯唇音〈筆者注：/ɱ/〉）v->w-の過程を経たと考えられるが、明初において已にw段階に到達していたことが流効の両摂の韻尾標記に微母を用いたことによって判明する。というのは流効両摂の韻尾はu若しくはoであると考えられるから、微母が当時vであったと考えるよりwであったと考える方がより合理的であろう。なお注意すべきはこの「伊路波」の表Aの中に見出される「京音 kyow」及び「上音 zyaw」という標記である。ここにおいても微母w（筆者注：*M*）によってキャウ及びジャウのウを示している。この日本字音の標記は朝鮮字音及び中国音の流効両摂の韻尾標記を適用したものであろう。」

1. 『語音翻訳』は『海東諸国記』（申叔舟編纂1471年）の附録として付載（1501年成希顔による記録）されたもの。「語音翻訳」の解読は伊波　1974：57-122。解説は菅野　1991：433-440。
2. 福井氏はㅇ（’：ゼロ子音）を「解例本の中では，不清不濁の喉音と積極的に規定されており，これは音声的にはいわゆる‘gradual beginning’原注1に該当すると考えられる。（略）」（福井　2013：39-40）とみられています。また上の原注1（同書：40）には「（略）服部四郎（1951/1984）は「ゆるやかな声立て」と訳している。また，服部四郎（1980）は日本語などにおいて母音ではじまる音節の初頭に喉音音素/’/を設けるが，それにも積極的な音声的事実があるとしている。」と、福井氏は注されています。

そこで服部氏の「‘gradual beginning’(筆者注：ゆるやかな声立て)」をㅇ（/’/：喉音要素）、そしてそれにたいする「‘clear beginning’(筆者注：はっきりした声たて)」をㆆ（/ʔ/：声門閉鎖音）と考えると、ㅇの変化を次のように考えることができるでしょう。

A：ㅱ（ある不明の唇音*M*）→ㆁ（軟口蓋鼻音/ŋ/）→ㅇ（口垂鼻音/ɴ/）→⌀（消失）

B：ㆆ（はっきりした声たて）→ㅇ（ゆるやかな声たて）→⌀（ゼロ：表記は残存）

＊この考えは「第5節　初声喉音字を考える」（～/korean/korean1hp.docx）のなかで指摘しておきました。

ところで16世紀末の『高麗詞之事』に「歌ヲ謡ヘ」の韓国語訳が「ドロカエ（norɣai：歌・ヲ）ブルラ（謡ヘ）」であることにたいして、福井氏は「놀애」（nor‘ai：（古）歌）→「노래（norai：歌）」（天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55：122,119）の変化が想定されるとして、このㅇを「この資料（筆者注：上の『高麗詞之事』）はおそらく16世紀末の南部方言を写したものと考えられるが，かつての方言の中にはこのように古い\*kを保存するものがあり，中世語では，それがɣ（筆者注：有声軟口蓋摩擦音/ɣ/）となっていたわけである。」（福井　2013：41）と、ɣの存在を主張されています。

＊『陰徳記』（巻七六）に所載された「高麗詞之事」については『山口県地方史研究』（51号　1984.6）に、布引敏夫氏の「『陰徳記』の日朝会話集について―文禄・慶長の役における日本軍の暴虐」があります。

1. 倭語類解（17世紀後-18世紀初）には「梅・馬・奪う」にたいして、次のような表記がみられます。

|  |  |
| --- | --- |
| 京大国語国文研編　昭和33：125,169/156,13/183 | 諺文假名對照表（解説6） |
| 梅 ᄆᆡ/마이實실/ᅀᅵ쯔 〇（’mumjəi no mi）  梅 ᄆᆡ/마이花화/파　 〇（’mumjəi no hana） | う 우（’u）  は 하（ha） ぱ바（pa）  ば ᄜᅡ（mpa）ぶᄜᅮ（mpu）  ま 마（ma）  む 무（mu）/ᅃᅮ（’mu）  んᄂ　ᄆ（nm：連書字） |
| 馬 ᄆᆞᆯ마/ᅄᅡ　　　　　〇ᅃᅮ（’muma）  午 오/ᅁᅩ　　　　　　〇（muma） |
| 奪 아슬랄/다쯔　　　〇（’upa’itoru） |

＊割注は/で示す。割注の左は朝鮮漢字音、右は日本漢字音。ひらかなのルビと（　）内の翻字は筆者。「ᄂ　ᄆ」はㄴにㅁの連書字。

1. 倭語類解：「倭왜（’oai）京경（kyəŋ）　○교우도（kyo’uto） 」「今日　○교우

（kyo‘u）又云곤니지（konnici）」（京大国語学国文学研究室編　昭和33：217,8）。

東国正韻：「겨ᇰ（kyəŋ）平　京驚荊麠麖上同（略）」「금（kɯm）平　金今紟又本韻　譖韻（略）」（建

國大學校図書館蔵　1973：132,285）。

＊「京」：庚韻kɪɛŋ。「今」：侵韻kɪěm。（　）内の翻字は筆者。

1. いま仮りにㅱをある不明のXとします。すると弘治五年朝鮮板伊路波ではᄝᅮと우がウの表記としてみられるので、もしᄝᅮ（Xu）と우（’u）を同音とみればその子音ㅱ（X）とㅇ（’）は同じで、ゼロ子音とみるのがよいでしょう。また福井氏はㅇはø（ゼロ子音）、またはɣ（/ɣ/）とみられているので、ㅇがø（ゼロ子音）でないとすればㅇはɣ（有声軟口蓋摩擦音）と考えられます。そうするとㅱ（X）をw（微母）とする河野氏の考えとㅱ（X）をゼロ子音かɣとする現在通説となっている福井氏の考えとは相いれないでしょう。
2. 日葡辞書にはCŏ（開音：ひろがる）とCô（合音：すばる/すぼる）の表記がみられ、「Cŏquan. カゥクヮン（高官）/Cô. コゥ（甲）/Cŏuot.＊カゥヲ*ッ*（甲乙）高下」（土井・森田・長南編訳　1980：149,132,155）のような書きわけがみられます。しかしそのような書き分けがあったとしても、実際のところは開音（アウ）と合音（コウ：いまケウ類は略）は混同していたとみられます。その後開音（au→ɔ:）と合音（ou→o:）が合一し、現在のo:（オー）になったとみられています（外山　昭和47：214,256）。

しかし（筆者補：「法」（乏韻fïɔp）と「方」（陽韻fɪaŋ）の字には）「とくに古くから、「ハウ」「ホウ」の開合両音があったことが確かめられて（略）」（同書：221-2）います。また「甲」（入声2等狎韻ăp、平声1等談韻am）も同じように和名抄に「甲俗云古不」（奥村　昭和47：86）とあり、「古」（遇摂上声一等姥韻ko）は上代特殊仮名遣いの甲類字なので、この「甲」（古不：コ甲フ）は日葡辞書のCô（合音コウ）に、それにたいして「甲乙」（Cŏuot）の「甲」は（kăp→kau→）Cŏ（開音カウ）とみられるでしょう。このように「甲」が「カフ・コフ」、また「方」や「法」が「ハウ・ホウ」の両音をもっていたのは事実とみられるので、この事実をうまく説明する必要があるでしょう。

ところでこの開合両音の変化は最近の馬氏の「5.4　オ段長音の開合の音価と統合」の小論（馬　2023：292-323））をみても、「[au] ＞[ɔ:] ＞[o:]」（同書：320）となっています。しかし「（略）それよりも、第一、その前もあとも五母音で安定していた日本語が、その一時期だけ六母音であったとは、ほとんど考えられないことである。」（川上　1980：5）との、川上氏の当然すぎる批判があり、その批判を乗り越えるためのアイディアを述べてみます。

「甲」はkăp（上古葉部）→kăp（中古咸摂盍韻）と変化したと考えられている（藤堂編　昭和53：854）のですが、和名抄に「甲俗云古不」（奥村　昭和47：86）とあります。そこでこのような漢語の「甲」などの開合両音の存在を日本語の特殊な変化によると考えないで、その原因は中国語原音の変化のなかにあると考えます。

そのため「甲」の（介音zをふくむ）主母音を xと考え、原音借入時の中国語の主母音xをə（馬淵氏は万葉時代のアを中舌音[a]〈馬淵　昭和46：31〉とみられています）とみます。また現在の母音アは中世以後にə→aの変化から生じたと考えます。すると合音「甲」（コ甲フ→コウ）はkxPc→kzəu*P*（ただしP≠p）→kou（日葡辞書のCô）→ko:に変化したと考えることができるでしょう。そしてzəがaに変化する（ə/a分化）以前の「甲乙」の「甲」を（kxPc→kzəu*P*→）kzəuと考えます。つまり、kzəu*P*→kauの変化が起きていないときの（kzəu*P*→）kəuを開音（日葡辞書のCŏ）とみます。そしてこの開音kəu（Cŏ）はその後、kəu（Cŏ）→ko:と変化したとみれば、kɔ（開音）→ko:（合音）のようなありえない変化を考える必要もなくなるでしょう。

中国語の「高」は通説のような変化（上古宵部kɔg→中古効摂豪韻kau）ではなく、頼氏が陰類を消すことができるとされたアイディア（注14-17参照）によって「高」の変化をkxMc→kzəu*M*と考えます。すると、たとえば寧波方言の「【高】kɔ53」（陰平調は数字で代用；湯等編　1997：89）はkxMc→kzəu*M*（宵部）→kau*M*→kɔ53のような変化を考えることができるでしょう。また新潟方言には下表のようにɔ:/o:の2音がみられるのですが、寧波方言の「高」と同じように、kxM→kzəu*M*（日本語に借入）→kau*M*→kɔ:の変化を想定するとよいでしょう。

＊下表は馬　2023：317（「表5-16　方言における開合の別」）による。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 開音 | 合音 |
| 鳥取県 | [a:] | [o:] |
| 九州地方 | [o:] | [u:] |
| 新潟県 | [ɔ:] | [o:] |

今回は入声P/Tと陽類（xM→zəu*M*）の関係は省略します。上代特殊仮名遣いのオの甲乙の変化についての考察は略。

このような主母音əからaへの変化は「」の表記の変遷にみられます。たとえば「」の表記は「蹈」（号韻dau：呉音ダウ/漢音タウ）→「踏」（入声合韻thəp：呉音トフ/漢音タフ）→「榻」（入声盍韻thap：呉・漢音タフ）→「達」（入声曷韻dat：呉音ダチ/漢音タツ）→「立」（入声緝韻lɪěp：呉・漢音リフ/慣用音リツ）と変わって（藤堂編　昭和53：1282,1280,665,1327,951）います。

「踏」（入声合韻thəP〈≠p〉）の主母音əが鎌倉時代ころからaに変化し、「踏」はthaPになりました。そのため「踏（蹈ダウ）」のトフ（→トウ）ではthaPの音をあらわせなくなり、すでにthaPであった「」（入声盍韻thap：「 牛車から乗り降りするための踏み台」）を用いた「」に表記が変わったのです。その後、入声P（≠p）はT （≠t）と同音になったために、濁声母の清声母化（平山久雄　昭和42：139の表）によってtaTになっていた「達」（入声曷韻dat：「足が達する」の意）を用いて「脚達」の表記に変わったのです。そしてその入声韻尾Tはその後ツに母音化（taT→tatsu）されたために、さらに「脚立」（訓読みの「足が立つ」の意）に変わったのです。

＊志賀直哉の「暗夜行路」に「～脚立（キャタツ）を流しへ持ち込んで」（日本国語大辞典刊行会編　昭和48（6巻）：67）とあるそうです。

＊「「」の表記を考える（補訂版）」（～/japanese/japanese2hp.docx）参照。

1. A.「うま[馬]（名）❶（略）のは惜しけくもなし（雄略記一三年）（略）」

B.「むま[馬] （名）馬。（略）「の筑紫の崎に」（万四三七二）（略）」

C. 「うめ[梅] （名）うめ。（略）「「の花」（万八五〇）/「」（万八一五）/「梅実・烏梅・白梅牟女むめ」（本草和名）「梅无女むめ」（和名抄）【考】「乱れしめや」（万三三六〇）「」（万三九〇六）「」（万八一九）などは「梅」をメの仮名に用いたものだが、がマとも言われるのと同じようにをメといったかどうかは疑わしい。」（上代語辞典編修委員会編　1967：129,728,133）。

D.『倭名類聚鈔』（和名抄とも。源順編931-8年ころ）：「梅　爾雅注云梅莫杯反和名宇女似杏而酢者也」（正宗編　昭和53（覆刻）：17巻10裏））。

E.『本草和名』（深根輔仁撰918年）：「梅實烏梅白梅相似出陶景注（略）和名牟女」（與謝野・正宗編　大正15：下30オ）。

F.『日本寄語』：「梅子面婆水」「馬烏馬」（京大國語學國文學研究室編　昭和40.9：ともに影印17下段,17下段）。

G.『日本風土記』：「梅花烏密那法乃」「馬烏馬」（京大國語學國文學研究室編　昭和36：影印74上段,75上段）。

1. 「（略）もっとも、表記は「うめ」から「むめ」、再び「うめ（明治四十三年より使用の国定の尋常小学校読本では、「ガサキダシマシタ」とある）」へと回帰するが、（略）」（遠藤　2002：319）。
2. 「うめさきぬ どれがむめやら うめぢややら」の句は蕪村。句前の添え書きには「あらむ

つかしの仮名遣やな　字儀に害あらずんばアヽまゝよ」（亀井　平成4：321）とあるそうです。

亀井氏はその句と同名の論文（亀井　平成4：271-348）を書かれていて、筆者もその論文にあやかり、HPに「13．『梅咲きぬどれが梅（むめ）やら梅（うめ）ぢややら』（１７５６）」（～/rendaku/rendaku8.html　2003.09.01）をのせました。当時は橋本説そのままに上代の「梅」（烏梅）をũme、また中世の「梅」を単純にmmeと考えたため、その考察は不十分なものでした。

1. 橋本氏はロドリゲスのVの発音を、「実際の音は、純粋のmでもuでもなく、その中間の曖昧な音であつたやうであるが（略）」（橋本進吉　昭和36：234）とみられていたようです。次注の「ウトムトノ間ヲヨム」の注記参照。

「〇V（う）の音節が言頭に於いてMa（ま），Me（め），Mo（も）の前に立ってゐるものは，明瞭なVでなく,閉ぢた口の中で発音してそのまま抑止されるのである。例へば，Vma（馬），Vmaruru（生るる），Vmaya（厩），Vme（梅），Yabu vme（藪梅），Vmoruru（埋るる），地中に埋れた木を意味するVmoregui（埋木），など。（略）‘う’（V）の代りに‘む’（Mu）を使って，‘むま’（Muma），（略）‘むめ’（Muma）（略）などのやうに書く。（略）」（土井訳註　昭和30：638-9）。

1. 『新撰仮名文字遣』には次のようにあります（大友・木村編　昭和56：影印96）。

「一　むもし（筆者注：ム文字）をかくかなの事

むまこ　孫　　　むま　馬

むめ　　■　　　むはら　荊（以下、略）」

＊亀井氏のいわれる異本は筆者未見。■の字は「木」と「每」の字を縦にした字（木每）。

＊大友氏は解題で新撰仮名文字遣の「原稿が出来たのは、「永禄丙寅」年、すなわち、永禄九年（一五六六）が目安となる。」、しかしその原稿は「（略）結局は、出版されなかったものと思われる。」（同書：243,244）と述べられています。

また契沖の和字正濫鈔（巻五：「むとうにまぎるゝ詞」の「凡もじもじ、上にありて、濁れるとと両字次でうけ、の三字次でうくれば、上のともに、口をふたぎてはぬるもじのようになるなり。其外はまがはず（略）」（亀井　平成4：309）との記述から、亀井氏は「「うば(祖母)」と書くこの「う」も、「うもれ木」と書くべきこの「う」も、これらともに撥音の[m]に準ずる単位なるべきをここに知る。」（同書：309）とされています。

ほかにも冷泉家所伝のとして、古今和歌集（巻五）に「「むべ」の「む」にたいして、そのに「ウトムトノ間ヲヨム」と書きそえた」（同書：310、写真版346）記述など、ムの音への注記は数多くみられます。

また有坂氏は契沖のいう「むとうにまぎるゝ詞」の注記から、「併して平安朝前半期の或時代に於て、「語頭の｛u｝は、之に從ふ｛b｝又は｛m｝の次に｛a｝｛o｝｛e｝のいづれかが存在する場合、｛ṃ｝に變ずる。」といふ法則に從って音韻變化が起こつたものと思はれる。」（有坂　昭和30：695）と考えられています。

1. 亀井氏は「こんにち音声学においては、音節主音となる場合の[m]はこれを[ṃ]〈筆者注： mの下部に小縦棒（成節子音の記号 ∣ ）、ここではmの下部に小点で代用〉とするのがその約束であるが、わたくしは自分の好みにまかせて、拍のタームズにおける″（自）響音（sonant）″を写すにṃ〈筆者注：m の下部に小丸（無声化記号）の代用〉の方式をもってする。（略）もっともこのように思うその背景としては梵語の中性鼻音をローマ字へひるがえす場合のその方式の一つ〈筆者注：空点ँ〈鼻母音化記号〉の翻字 ṃ（m の下部に小丸の代用）〉がわたくしの心に影を投げている。」（亀井　平成4：273）と述べられています。

そして亀井氏は「この[ṃ]〈筆者注：m の下部に小丸〉は、ウにではなく、ムに同定することがこのもしいであろう。（わたくしの発音では「うま（馬）」「うめ（梅）」「うまれる（生）」のはひとえに[ṃ]である。）（略）」（同書：340）とされています。

1. 「梅」には薬用の「烏梅」と花の「梅」があったとの鶴久氏の考え（論考「烏梅」『香椎

潟』（36号）は筆者未見）を引用して、遠藤氏は、次のように述べられています（遠藤　2002：320）。

「六朝時代の文献にも（略）薬物としての烏梅の用例がいくつか拾え、そこから、

烏梅こそ（薬物としての）本来の用字であり、のちに梅の用字も観賞用のウメ（筆者注：これは花としての梅）と共に将来されたものであろう…（烏梅は）中国からの直輸入の用字であって、和製の用字ではなかったのである（原注3）。」  
　そこでこの「烏梅」が中国語からの直輸入の借用語である（注35のC【考】の記述参照）とするなら、借用語「梅」が2音節の「烏梅」になったのはなぜかと問うのではなく、「烏梅」の表記はなぜ「牟女」へと変わったのかと問う必要がでてくるでしょう。

「馬」の原音は一音節（mă）であったと思われるので、「ウマ（馬）ウマゴ（孫）ウマシ（旨）ウマラ（ウバラ、茨）ウメ（梅）ウバフ（奪）ウベ（宜）等の第一音節は、凡そ新撰字鏡の頃までの文獻では必ずウ（宇類）の假名を以て寫されてゐるのであるが、その後はムであらはされることが多くなつた。（略）」（有坂　昭和30：690）のです。そこで「ウマとウメとがそれぞれに大陸からの借用語（筆者注：mă/muəi）であるとするかぎり、なぜこれらが二拍の形で定着したかという問題。二拍の形へ定着するにあたって第一拍に期待される音としては、はたしてどのような音がいっそうしかるべしいか――。（略）」（亀井　平成4：333）と亀井氏が疑問を起こされたように、やはり語頭の第一音節のウを問題にすべきでしょう。

1. 「（筆者補：11世紀末から12世紀頃成の類聚名義抄）観智院本や蓮成院本では既に（筆者補：字音の三内撥音尾（m/n/ŋ）の）識別が消失しているけれども、図書寮本や高山寺本では明瞭な識別が存在している。例えば図書寮本では、

｟m｠　憺タム（略）（改行）｟n｠　憚タン（略）（改行）｟ŋ｠　紅クㄴウㄴ（略）

の如くである。ことに注意すべきは、｟ŋ｠に於てウの右肩にㄴなる注意符号（筆者注：大野氏のウの右肩のレ点）が附けられている。これはウが〔u〕に非ずして〔ũ〕のような撥音である事を示す為のものである。然るにこのㄴが韻尾のみならず頭子音の方にも付けられている。即ち

懃コㄴン　跋ハㄴチ　濁チㄴヨク　詞シㄴ　漁キㄴヨ　陳チㄴン

等の如く、音注の始めの仮名の右肩にも存するのである。（略）即ち一方において撥ねる音、他方において濁る音につけられた事の、共通点を音声現象より眺めると、鼻音であろうということを認めねばならない。（以下、略）」（吉田　2013：123）。

＊原載の論文「類聚名義抄にみえる和音注について」（『国語学』第6輯：1951）では「（略）音声現象より求めれば、鼻音的なる事を認めねばならない。」（吉田　1951：49）となっていて、上の「音声現象より眺めると、鼻音であろうということを認めねばならない。」とは少々の（かなり大きな）違いがみられます。

＊上の「憺タム」以下の例字は宮内庁書陵部蔵　昭和44：242-1,254-2,309-6,256-3,102-4,11-7,74-7,60-5,208-2。また国語音にも「堕コホㄴツ」（同書：233-1）がみられます。

1. ロドリゲスの「日本大文典」には次の記述がみられます（土井訳注　昭和30：620,637）。

A.「ある語は一種半分の鼻音或いはソンソネーテをとるのであるが、それをN又は明白な鼻音に変へてはならない。例へば，（略）Nàgasaqui（長崎）の代りに（略）Nangasaqui（なんがさき）といふなど。」

B.「○D，Dz，Gの前のあらゆる母音は，常に半分の鼻音かソンソネーテかを伴ってゐるやうに発音される。即ち，鼻のなかで作られて幾分か鼻音の性質を持ってゐる発音なのである。例へば，Māda（未だ），Mídŏ（御堂），Mádoi（惑ひ）（略）。」

C.（橋本氏の例）：「長崎をNangasaqui平戸をFirando關白殿をQuambacundono」（橋本進吉　1950：5）。原載の『方言』（2巻1号：昭和7.1刊）は筆者未見。

1. （引用文よりつづいて、）「その音は、何時からあらはれたか、又その後どうなつて行つたかゞ國語音聲史上の一問題となるのであるが、上代に於て、ユミケ（弓削）がユゲとなり、（略）シモツエ（下つ枝）シヅエとなつたやうな例は、ミやモのやうな鼻音を含む音節が無くなつて、下の音が濁音になつたとするよりも、yumike→yumke→yumge→yũgeの如く、鼻音の要素が、次の音を有聲化して濁音とすると共に、その前の母音を鼻音化させたと解する方が自然であり、また、平安朝以後に存する打消の「で」（「行かで」「思はで」などの「で」）も、その前の母音に鼻音化があつたとすれば、（略）この鼻母音の存在は或は存外古いものかも知れない。（略）」（橋本進吉　1950：5-6）。

このように橋本氏はロドリゲスの「常に半分の鼻音かソンソネーテかを伴ってゐるやうに発音される」という記述（注43のB参照）から鼻母音のũとみられたようです。しかし問題もあります。もし前音節のmの影響でその前にある母音uが鼻母音化（ũ）したと考えるなら、yumike→yũge（「」；上代語辞典編修委員会編　1967：781）の変化、つまり母音イの消失が上代にすでに起きていたとみなければなりませんが、上代にそのような変化は考えられないでしょう。

＊「第12節　母音の無声化はいつまで遡れるのか」（～/japanese/japanese1.docx）。

1. 「烏」（大野氏のレ点（ㄴ）を伴ったウレ）のウを鼻母音のũとみる見方は多くあります。しかし「鞭」は「『和名抄』に「鞭　野王案鞭音篇和名無知俗云無遅」（朝山　1992：114）とあり（ただし「鞭　野王案」は筆者補：正宗編　昭和53：巻15-5表より引用）、また「【考】第四例和名抄ではムヂの形も見え、新撰字鏡では「鞭夫知ブチ」（上代語辞典編修委員会編　1967：726）もみられます。そこで「鞭」（「鞭無知」）のムと語頭濁音のブ（「鞭夫知ブチ」）との関係、また語頭濁音を一種の前飾音的な鼻音音節とみて、そこに語頭のウとの関係をみる朝山氏の考え（朝山　1992：109-120）、さらには第3節で紹介した弘治五年朝鮮板伊路波（1492年刊）にみえる「う　音ᄝᅮ（割注）」の記述などを勘案すれば、上代の「烏」を鼻母音ũではなく、大野氏の「鼻母音的であった」とみるのがよいでしょう。

次回は鼻母音的であった「烏」とは何かについて、さらに考察することにします。

1. 「（2例略）○むべ山風を　ムトウトノ間ニヨム。　　（早大本百人一首作者読曲之伝）

　このような「A（の仮名）とB（の仮名）の間に読む」の注記は、仮名が音声を正確に反映しなくなってから生じる現象で（原注20）、例えば、バ行頭子音が強い鼻音を前接していた時期に、「神な　神ナビト云へシ　本ハミトモヒトモキコヘヌ様ニ、ミノアハヒニヨムヘシ（東大本古今集聞書・巻五－二五三）」「なへてかなしも　ヘトメトノアハヒ也（古今集清濁）・巻二〇－一〇九六）」のような注記で[mb]の音を示そうとしたり、「忍もずり　鼻ニ入テニコルシルシ也」（清濁読曲密訣・初段）」の「△印」で濁音の前の鼻音を表そうとした手法も、ともに仮名で表記しきれない微妙な音を、表現や記号によって示そうとした苦肉の策ということになる。（略）」（遠藤　2002：347-8）。

【引用書】

＊中国・韓国人名は日本語読み。

＊複製本や再版本がある場合も初版の注記（書名・出版年・版次など）はほとんど省略してあります。

朝山信彌　1992　『朝山信彌国語学論集』　朝山信彌著作集刊行会編　和泉書院

有坂秀世　昭和30　『上代音韻攷』　三省堂出版

有坂秀世　昭和32　『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂

伊藤智ゆき　平成19　『朝鮮漢字音研究　資料編』　汲古書院

伊波普猷　1974（2刷1993）　『伊波普猷全集　第四巻』　伊波普猷著　服部四郎・仲宗根政善・外間守善編　平凡社

遠藤邦基　2002　『読み癖注記の国語史研究』　清文堂出版

大友信一・木村晟編　昭和56　『新撰仮名文字遣』（駒沢大学　国語研究　資料第三）　汲古書院

大野晋　1953（2刷）　『上代假名遣の研究　日本書記の假名を中心として』　岩波書店

奥村三雄　昭和47（6版：昭和57）　「第二章　古代の音韻」『講座国語史　2　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

小倉進平　昭和49.10　『小倉進平博士著作集（一）　郷歌及び吏讀の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學会

＊「郷歌及吏讀の研究」(京城帝國大學法文學部紀要　第一)　 京城帝國大學（昭和4年刊）の複製

亀井孝　平成4　『亀井孝論文集6　言語　諸言語　倭族語』　吉川弘文館

川上蓁　昭和55.7　「アプからオーまで」『國學院雜誌』（81巻7号)

姜信沆　1993　『ハングルの成立と歴史』（日本語版協力：梅田博之）　大修館書店

菅野裕臣　1991　「言語資料としての『海東諸国記』」『海東諸国記』（岩波文庫）　岩波書店　1991

京大國語學國文學研究室編　昭和33（1958）　『倭語類解』　洪舜明撰　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大國語學國文學研究室編　昭和36　『全浙　兵制考日本風土記』（本文、解題、國語・漢字索引）　侯継高撰　京都大学文学部国語学国文学研究室編　京都大学国文学会

京大國語學國文學研究室編　昭和40.7　『弘治五年朝鮮板伊路波　本文・釋文・解題』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大國語學國文學研究室編　昭和40.9（1965）　『日本寄語の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大國語學國文學研究室編　昭和47.9　『三本對照　捷解新語　本文篇』　康遇聖著　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

金完鎭　1980（7刷1986）　『鄕歌解讀法研究』（韓國文化研究叢書21）　韓國文化研究編　서울大學校出版部

金東昭　2003　『韓国語変遷史』 栗田英二訳　明石書店

宮内庁書陵部蔵　昭和44　『図書寮本　類聚名義抄』　宮内庁書陵部（解説）・橋本不美男（出典索引）・築島裕　勉誠社

建國大學校圖書館蔵　1973　『東國正韻　全』（影印本）　建國大學校出版部発行

河野六郎　1968　『朝鮮漢字音の研究』　私刊

国立国語研究所編　昭和51　『沖繩語辞典』（国立国語研究所資料集　5）　大蔵省印刷局発行

小学館・金星出版社（韓国）共同編集　1993（21刷2011）　『朝鮮語辞典』　小学館

上代語辞典編修委員会編　1967　『時代別国語大辞典　上代編』　三省堂

中国語学研究会編　昭和45(再版訂正)　『中国語学新辞典』　光生館

趙義成訳注　2010　『訓民正音』（東洋文庫）　平凡社

陳彭年等（重修者）　民國80　『校正宋本廣韻附索引』　藝文印書舘（校正・印刷）

天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55（初版：昭和42）　『現代朝鮮語辞典（改訂）』　養徳社

天理圖書館善本叢書編集委員会編　昭和51　『天　理圖書館善本叢書　類聚名義抄觀智院本僧』（天理圖書館善本叢書和書之部第三十三巻）　天　理圖書館善本叢書和書之部編集委員会編　天理大學出版部（刊行）

土井忠生訳註　昭和30　『日本大文典』 ジョアン・ロドリゲス著　三省堂出版

土井忠生・濱田敦・安田章　『国語国文』（28-9）　1959.9　（京都大學文學部國語學國文學研究室）京都大學國文學會編　中央圖書出版社発行

土井忠生・森田武・実編訳　1980　『邦訳日葡辞書』　岩波書店

湯等編　1997　『寧波方言詞典』（現代漢語方言大詞典・分巻）　李榮主編　湯珍珠・陳忠敏・呉新賢編纂　江蘇教育出版社

藤堂明保　昭和42（7版：平成3）　「Ⅱ　音韻論　1　上古漢語の音韻」『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

藤堂明保・小林博　昭和46　『音注 韻鏡校本』　木耳社

藤堂明保編　昭和53　『学研　漢和大字典』　学習研究社

藤堂明保　1980（昭和55）『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館　＊江南書院1979年の改版本。

藤堂明保　昭和62　『藤堂明保中国語学論集』　汲古書院

外山映次　昭和47（6版：昭和57）　「第三章　近代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

日本大辞典刊行会編　昭和48（6巻）　『日本国語大辞典』　小学館

橋本進吉　1950（20刷：1976）　『橋本進吉博士著作集　4　国語音韻の研究』　橋本進吉博士著作集刊行会編　岩波書店

橋本進吉　昭和36　『橋本進吉博士著作集　11　キリシタン教義の研究』（第十一冊）　橋本進吉博士著作集刊行委員會編　岩波書店

橋本萬太郎　1981　『現代博言学　言語研究の最前線』　大修館書店

服部四郎　1951（旧版；25刷：1977）　『音声学』（岩波全書）　岩波書店

平山久雄　昭和42（7版平成3）　「Ⅱ　音韻論　3　中古漢語の音韻」『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

平山輝男編著　平成4　『現代日本語方言大辞典　１　あ-う』　平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編集　明治書院

福井玲　2013　『韓国語音韻史の探究』　三省堂

馬之壽　2023　『《日本国考略》所見室町時期日語語音』（『『日本国考略』から見た室町時代の日本語音』）　武漢大学出版社

前間恭作　昭和49.6　『前間恭作著作集　下巻　龍歌故語箋・雞林類事麗言攷　他九篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

正宗敦夫編　昭和52　『覆刻　日本古典全集　塵袋　上』　現代思潮社

正宗敦夫編　昭和53　『覆刻　日本古典全集　倭名類聚鈔　三』　現代思潮社　＊「倭名類聚鈔　十五-廿」（正宗敦夫編　日本古典全集刊行會）の覆刻（昭和6年刊）

馬淵和夫　昭和46（6版：昭和57）　『国語音韻論』　笠間書院

水谷真成　昭和42（7版：平成3）　「Ⅱ　音韻論　2　上中古の間における音韻史上の諸問題」『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

三根谷徹　1993　『中古漢語と越南漢字音』　汲古書院

諸橋轍次　昭和41縮寫版（初版：昭和31）　『大漢和辭典縮寫版　巻三』　大修館書店

與謝野寛・正宗敦夫編纂　大正15　『本草和名　下巻』（日本古典全集第一回）　日本古典全集刊行會

吉田金彦　2013　『古辞書と国語』　臨川書店　＊原載「類聚名義抄にみえる和音注について」『国語学』（第6輯　1951.6）。

頼惟勤　1989　『頼惟勤著作集Ⅰ　中國語音韻論集』　汲古書院